

1. 水産資源解析とは —水産資源解析の入口から出口—

1.1 概要

水産資源解析の最終的な出口は資源管理です。その資源管理に至るには4つの段階があります(図1.1)。入口の第1段階では年齢や成長など水産資源の資源特性値を明らかにする必要があります。そして、これらの資源特性値と漁獲量や努力量のデータなどを用いて、第2段階では資源量や漁獲率などを推定し、資源を評価します。第3段階では資源が健全か、乱獲になっていないか、資源を診断します。資源診断は、漁獲係数と漁獲開始年齢の関数として示される等量線図(等漁獲量曲線)や親子の量的関係を示した再生産曲線などに基づいて実施されます。そして第4段階では水産資源の有効利用を目指した管理目標を達成するため、漁獲量の制限、使用する漁具の網目の大きさ、禁漁区・禁漁期などで漁業規制することにより、漁業を管理して、資源を管理します。なお、資源の管理目標を達成するためには、漁業規制だけでなく、魚種によっては、種苗放流、漁場や産卵場の環境整備も、有効な方法の1つです(松宮 1996)。

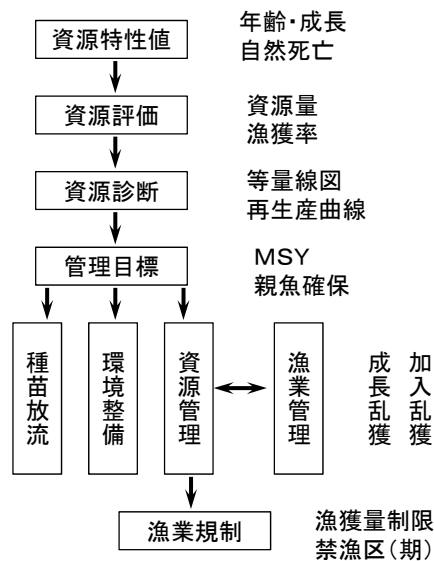


図 1.1 資源特性値推定から資源評価、資源診断、資源（漁業）管理、漁業規制に至る概念的な流れ図 (松宮 1996)

1.2 引用文献

1.2.1 松宮義晴. 1996. 水産資源管理概論. 日本水産資源保護協会, 東京, 77pp.